2019
秀作

第52回「おかねの作文」コンクール

ありがとう、今月のお小遣い

山梨県・北杜市立甲陵中学校　２年　中村　葉子

私は今年の夏、初めて「自分で商品を作って売る」ということを経験した。やってみて初めて毎月のお小遣いに母が渡してくれる千円札の大切さを実感した。

今年は、毎年の家族の楽しみであったディズニーリゾートはなし、ということに家族全員が同意した。犬を飼い始めたからだ。私は以前から犬を飼うことが夢であり、犬を飼うためならどんなことでもできる、と大げさなことを考えていた。

ところが春になってから、私が所属している弓道部の２年生全員で、ディズニーシーに行こう、という話が持ち上がった。当然私はどうしても行きたくなってしまった。しかし、今年はディズニーリゾートには行かない決心をしたのだし、犬を一番欲しがったのも私だった。貯金からお金を出そうか、と考えていた時に母が「一緒に直売所に出荷をしてみよう」と提案してくれた。

私の父は農家で、私の住んでいる富士見町の特産品である、赤いルバーブを育てている。母の提案は父の代わりに週末にそのルバーブの出荷をしよう、というものだった。これでディズニーシーに行ける、そう思った私はルバーブの出荷をすることにした。

そして土曜日、私は朝７時半に母と一緒に畑へ行き、雨の中、収穫を始めた。父に教わった通り、上から見て少し赤い葉のものを選んで取り、葉を取って茎だけにしてコンテナに入れる。この単純作業を延々と１時間半繰り返し、やっとコンテナ二つがいっぱいになった。家に帰り、今度は梱包作業に移った。採ってきた茎をすべて拭き、虫喰(くい)のある箇所や、緑っぽい部分を包丁で切り落とし、重量を量って袋に詰める。12時までにお店に持っていかなければならないのに、母と二人がかりで２時間半作業して、半分しか終わらなかった。父はこんなに大変な作業を毎日のようにやっているのか、と思った。

結果、土曜日に出したのは17袋、日曜日に出したのは24袋だったが、その

© 金融広報中央委員会 2019

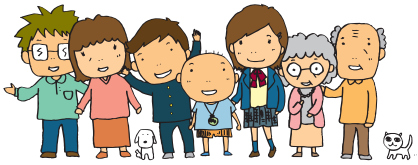
全てが売れた。１袋500円なので売り上げは２万500円、そしてその８割が生産者の取り分となるので約１万6,000円稼ぐことができたということだ。このように数字が出てくると、とても達成感があった。母や父の力を借りたとはいえ、自分でこの数字を出したのだ。一歩、大人に近付いたと思う。

２日間、ルバーブの出荷をして、うれしかったことが二つある。一つ目は、土曜日にお店に完成した商品を出しに行った時のことだ。私が売り場に商品を並べていた時に、さっそく買って下さった人がいた。その人は約５袋買って下さり、私にこう尋ねた。

「明日もこの位の時間に来たら出している？」

私はこの言葉を聞いて明日もがんばろう、という気持ちになった。父は収入のためだけでなく、このような言葉を聞くためにも、農業をしているのではないか。やはり、自分が出荷した商品を買ってくれる人がいるとうれしくなる。二つ目は、梱包作業によってどんどんルバーブが商品らしくなっていくことだ。ルバーブは収穫したばかりは「ただの赤い茎」に見える。しかし、それをきれいにして袋にきっちりと入れることでだんだん「おいしそうな赤い野菜」に変身していくのだ。それを私がやったのだと思うと、誇らしい気持ちになる。ここで少し手を抜いても売れるのかもしれない。でも私は「おいしそう」と思い、ルバーブを知らない人でも食べてみたくなるような商品を作りたい。

お金を稼ぐのは、とても大変な仕事だった。楽しいこと、うれしいこともあったが、これを毎日続けるのは今の私には不可能だろう。しかし、両親は毎日やっているのだ。そう考えると、毎月お小遣いとしてもらっている千円札はもっと大切に使わなくてはいけないものなのだと感じた。私は今回得たお金で、部活の仲間と一緒にディズニーシーへ行くことができる。自分の力で手に入れたチケットを使えば、今までよりもっと楽しい一日になるだろう。



© 金融広報中央委員会 2019